

裾野召団創立十周年記念集会 第二回（御殿場）

使徒ヨハネの本質（二）

1989年4月23日

小池辰雄

神の本願 受肉 カナの婚宴 姦淫の女 本願の愛 洗足 聖霊・助主・慰主 大祭司の祈
愛は神より出づ 永遠の生命たる口「ス 視よ、我れ戸の外に立ちて叩く 羔こひやの婚姻

●神の本願

昨日から、ヨハネの霊統、パウロの霊統、ペテロの霊統のことを申しました。愛と信と望です。愛・信・望を、実は一つの言葉で言える。何という言葉でしょうか。それは「本願」なんです。キリストの愛もみんな上から来ている。信も愛も望も、全部上からの力、上からの光、上からの生命、上からの愛です。これは一つの言葉でいうと「本願」、神の願いです。神の願いだから、「神願」といった方がいい。これは必ず成る。

「私はキリストの愛に圧倒されて生きています」

と申し上げるのは、「キリストの愛」「キリストの信」「キリストの望」に圧倒されているのであつて、こちら側の何ものでもない。だから、もの凄い力が来る。必ずそれは成っていく。パウロのコリント前書13章は愛の讃歌と言われるけれども、しかし、愛のことは実はヨハネ第一書第4章が最高のところですよ。パウロのコリント前書13章よりも凄い。それだけ、ヨハネの本質その二は、正に「愛」なんです。昨日は「永遠の生命」でした。生命の質は何かというと、これは愛なんです。愛なき生命は生命でない。「永遠の生命」といったって、時間的にただ長くたつてしょうがない。その質は愛である。愛だけが永遠である。信も本当は愛なんです。

何を信ずるんですか。神さまの愛、キリストの愛を信ずる。何を望むんですか。神さまの憫あわれみを、キリストの愛を望む。しかも、それは全部上から来ている。必ず成る。こんな消息は他にない。仏教で如来の「大慈大悲」というのは素晴らしい言葉です。要するに、人間はこちら側からはどうにもならない。どうにもならない者を本当にもの凄くしてくださるのは、上からの力であつて、こちら側の何ものでもない。祈りも祈らされている。祈らざるを得ない世界ですから。ダイスマンが、

「我々の信仰はレアクツイオン、反射的なことで、向こうからの信に応えるのが本当の信だ」

と言った。その通りです。向こうで我々を信じ、愛し、望んでくださるんです。これは本



当に全部「本願」です。

だから、モーセの律法も本当は「おきて」ではない。

「汝殺すなかれ」

ではない。

「汝は殺人はしない。私がお前の神であつて、お前は殺人なんかできるか」

というのが律法の隠れた本当の意味です。

「殺すべからず」

ではなく、これは

「殺さず」

あるいは、

「殺さじ」

です。人間はそれにも背く。どうにもならん。だから、もう仕方がない。非常手段でキリストが十字架にかかられた。キリストの十字架は非常手段ですから。十字架の贖いなくしては救いは来ない。歴史の終末まで十字架はつきり立っている。

●受肉

ところで、今日は、その愛の消息を学びたい。ヨハネ福音書とヨハネ書翰とヨハネ黙示録、私はこれは全部、ヨハネ伝で貫いていると思う。学問的にはいろんなことを言いますけれども、全部これはヨハネです。

何といつても、ヨハネ第一章は最初の所です。私の第十巻の「受肉」（9月3日）のところに、

「元始に言霊があつた、言霊は神と共に在った。言霊は神であつた。…³万

物はこれによつて成つた。…⁴この中には生命があつた。そしてその生命は

人々の光であつた。…¹⁴言霊は肉となつて我らの中で幕屋した。我らは彼の

栄光を見た。父からの独子の栄光で恩恵と真法とに満ちていた。

この「恩恵と真法」は、私は自分の訳では「まこと」は「真法」と書いた。「モーセの律法」ではない。モーセの方は「律法」だ。

¹⁷律法はモーセによつて与えられ、恩恵と真法とはイエス・キリストによつて到来した。¹⁸未だ神を見た者はない。ただ父の懷の中に没入した独子のみがこれを顯した。」（ヨハネ1：1、3、4、14、17、18）

「神の懷の中に没入した独子」ということ。イエスは本当に神の愛の中に包まれていた。我々はキリストの中に包まれる。いつも私は「神・キリスト・我」の三重の内接円を書く。

私たちの肉体に一番大事なものは何ですか。食物ですか、水ですか。そうではない。空気です。水は何日かは飲まないでも断食できる。空気は10分と吸わないではいられない。この「気」、大気です。これは誰もお金を払わない。水は、ある時はお金を払うこともある



かも知れない。眠っていても空気は吸っている。空気に包まれ、空気を吸って、血は清められている。この「氣」の世界です。大氣の懷の中に入って、我々は生きている。我々の魂はキリストの懷ふところの中に生きている。キリストは父の懷におられたが、我々はキリストの懷の中です。

ヨハネ伝15章の、

「私たちに連なっている、私の中に居れ」

と、「中に居る」「メネイン」という字は「宿る」という字です。

「その中にお宿としている」

ということ。キリストの中に宿っている。祈りの世界では、キリストをお宿として生きている。「祈り」と言ったら、私は祈りで余り言葉は使わない。私は瞑想して、グーッと中に入っていく。

「元始に言霊あり」

というから、言霊式な世界です。

キリストは神の懷の中に。私たちはキリストの懷の中に。それは正に愛の実相、愛の実相すがたです。そこには生命が来ている。キリストの愛は永遠の生命の質を持っている。一切の愛は神から来る。

「愛は神より出ず」

「神は愛なり」

とある。「愛」という言葉はとても説明できない。恋愛であろうと、何であろうと、全部神のものです。神から来ている。キリストから来ている。愛のいろいろな区別をしないで、そういう大きな角度からグッと掴つかんでいたのがゲートです。ゲートがなぜ大詩人かというと、「神・大自然・我」というものが融合している。それだけの文豪が日本にはいない。漱石さんが、

「則天去私」

と素晴らしいことを言っただけでも、そこまで自分は実は行っていないと、漱石の終わりの方の手紙にちゃんと書いてある。「則天去私」とは素晴らしい言葉です。天に則して私を去る。則天去私を百分百になさったのはキリストです。西郷南州がかなりその角度だ。素晴らしいね、あの人は。

「天を相手にせよ」

と言った。

地上から次の世界に行くとき、何を持って行くんですか。土地を持っていくんですか。お金を持っていくんですか。聖書も持っていけない。自分が聖書の文字にならなければ。

「汝はキリストの書なり」

とパウロが言った。自分が聖書にならなければ、向こう側には行けないわけだ。神の国の



入国試験の答案は何かと言うと、

「本当にみ霊に生きていたか、本当に十字架されていたか」

ということ。誰も人を審くことはできない。神のみ知り給う。

「あの人は天国に往く、あの人は天国にいけない」

なんて、人のことを言う必要はひとつもない。神さまだけが、キリストだけが知り給う。すべて神有です。公有も私有も全部神のもの。これが我々の本当の意識です。

「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの聖名は讃むべきかな」

と。あのヨブ記のところを読んで下さい。

私は第十巻を自分で書いて、よくもこれだけ書かされたなあと思った。私はしよつちゅう第十巻を自分で読んでいます。何しろ、聖書の文句が大きな字で書いてあるし、大事だから。そして復習する。また新しく、へえーこんなこと書いたかなんて、自分で学んでいる。

●カナの婚宴

その次はヨハネ伝第2章「カナの婚宴」(10月1日)のところになります。

「母、イエスに言う「彼らに葡萄酒なし」：イエス言い給う「女よ、我と汝と

何の関係あらんや、わが時は未だ来らず」イエス僕に「水を瓶に満たせ」：

饗宴長、葡萄酒に化りたる水を嘗めたり。：イエスこの第一の徴をガリラヤ

のカナにて行えり。」(ヨハネ2:3、4、7、9、11)

私が拾い出した句はそれだけです。第一の徴は婚宴の時のことであつた。葡萄酒が足りなくなつて、水を六個の瓶に満たしたら、それが葡萄酒に変わっている。キリストは、満たすと同時にもちろんちゃんと祈られた。これは靈酒だね、正に御神酒だ。ネクター、神酒に変わっている。大変な人です。このところを学者は何のかんの言う。私は学者ではない。私はバカだから、聖書に書いてあることをそのまま信ずる。

「聖書は神さまの言のかけらだ」

という言葉がある。まだまだたくさん、聖言はあるんだ。「聖書、聖書」と言うけれども、これは「かけら」だという。無限無量なもの的一端である。ただ、かけらがかけらでありながら、満ち満ちているわけです。溢れている。

「三日月が満月を抱く」

と私は言った。何年生きたかが問題ではない。どれだけ本ものに生きたか、それだけが問題です。量ではなく、全部、質の問題です。英語で、

“Not many, but much”

という。ラテン語で、

「ノン ムルタ、セッド ムルトウム」(量より質)

という言葉ですけども、そういう世界です。



しかも、そのお酒は今までのものよりかもっと凄^{こわ}い。饗宴長はそんなこと分^わかりはしない。水が霊水になる。大気が霊気になる。藤田東湖の「正気^{せいき}の歌」にある。天地の正気が、

「正大の気が秀でては富士の高峰となる」

という。あの藤田東湖というのは幕末の水戸の人で、素晴らしい人だ。

婚宴の所で、そのようにして祝福された。「羔^{うづ}の婚姻^{こんいん}」という言葉が黙示録の方に出てくる。いかに、キリストはこれを祝福されたか。彼自身はエクレシヤそのものを妻としたわけだ。エレミヤはイスラエルのエルサレムを妻と思っただくらいなわけです。エレミヤという預言者は本当に愛の深い預言者です。悲劇をもつて愛を表したのはホセアです。

●姦淫^{かんいん}の女

その次はヨハネ伝8章「姦淫^{かんいん}の女」（10月14日）のところです。私はこの所は原文をのせな

いで、私の詩をのせた。これは例外です。キリストはその女に、

「お前を責める者は、みんなどうしたか」

「いなくなりました」

と、この言葉が大事です。

「私もお前を罪^{つみ}しないよ」

と。収税人や遊女^{びと}は、偽善者よりも先に天国に行つてしまふと仰^{おほ}つた。キリストが嫌いなのはパリサイ人や偽善者です。

1 みめ美しく 純情^{じゅんじやう}の

女を捕へ 連れ来^{きた}り

パリサイ人ら 学の徒^たら

イエスのみ前に 曳^ひき出せり

2 「師よこの女 道^{みち}ならぬ

わざをせし時 捕^とへける

律法^{おきて}によれば 石^{いし}をもて

打^うつべきなるぞ 如何^{いか}にせん」

3 師は身を屈^{くつ}め 地^ちの上に

もの書き給^{たま}ふ 應^{こた}へせず

偽善者^{いつはり}どもは いらだちて

返答^{こたへ}を求め 問^とひ迫^{せま}る

4 師は身を起^たこし 言^{こと}ひ給^{たま}ふ

「汝^なれらのうちの 潔^{けつ}き者

石^{いし}を投げ打^うて！」 かく言^{こと}ひて

再^{また}た身を屈め

書き給ふ

5 この聖^み言に

胸打たれ

老ひも若きも

手の中の

石を落として

次ぎ次ぎに

姿を消せり

罪びとら

6 師は身を起こし

見給へば

女と師のみ

残りたり

「女よ汝れを

責むる者

何処^{いずこ}に在りや」

「誰もなし」

7 情け深くも

キリストは

彼女^{かれ}に手を按^おぎ

言ひ給ふ

「我も汝^なれをば

罪せじな

再びすなよ

いざや往け！」

8 人の心を

知り給ふ

主のまなざしは

いと深し

審^{さば}きと赦^{ゆる}し

あざやかに

現はし給ふ

荷^{にな}ひつつ！

●本願の愛

キリストは荷^{ゆる}ないつつある。赦^{ゆる}すのは、キリストは全部、荷^{にな}つていらつしやるからです。

「荷^{ゆる}いつつ」

という最後の言葉は大事です。この事態に私は感激して、詩にした。これだけを載せたわけです。

「我も汝を罪せじ」

と。ホセアがあゝの姦淫の妻を買いもどして、

「私もお前を捨てないよ。お前は私を捨てなよ、私もお前を捨てないから」

と。ホセア書のあるこの言葉がキリストの

「我も汝を罪せじ」

という言葉に相通ずる。イスラエルの民は神に背いた。それは宗教的姦淫である。けれども、それを戻して、

「私の愛はとことんまで愛し貫くんだ、相手を救い上げてしまふんだ」

という。これです。キリストの愛は赦し、荷^{ゆる}ない、そして救う。ただ赦すばかりではない。本当に救いあげてしまふ。この救い上げの内容が聖霊です。聖霊は愛の霊なんです。

それで、この女性はキリストに完全に救われてしまった。他はみんな逃げて行った。ダ



メだよ、逃げていつては。本当に申し訳ないと言って、キリストの前に平伏した男が一人でもいたかという、一人もない。どんなことがあっても、キリストに立ち帰らない限りダメなんです。だから、

「帰れ、帰れ」

と預言者たちが言っている。向きを変えろと。

私は「悔改め」なんて言わない。「回帰」、回り帰るといふ。これが「悔改め」という字の本当の意味だ。マルティン・ルッターが九五箇条の第一条で言った、

「汝ら悔改めよとは、クリスチャンの生涯は全生涯が悔改めであることをキリストは言われたのである」

とはさすがに名言です。

「全生涯が悔改めである」

ということは、

「全生涯が毎日、キリストの中に帰りいくことだけだ」

ということです。それが本当の前進だという。エレミヤの中には、

「もう帰ることすらできません、どうぞこつちへ来て下さい」と書いてある。

「こつちへやつて来て下さい」

と。これが本願を悲願している世界です。親鸞の信仰がそれです。『歎異抄』というのは素晴らしい本だ。親鸞自身が書いたのではないけれども。私はこうやつて話しながら、キリストに捕まえられていてしょうがない。あなた方もどうですか、聞きながら、そうでしょ。

「こつち側の信仰がどうだこうだ」

と、そんな事ではない。信仰をサムシングにして、

「信仰のみ、信仰のみ」

と、己の信仰を義としているのは冗談じゃない。

「信仰なんか何もありません」

ということです。

「信なき我を憫み給え」

ということだ。空気から逃げることをできないように、本当はキリストからは逃げることはできない。倒れてみたら、キリストのみ腕の中であつたという話だ。こんなありがたい事はないではないですか。それが「本願の愛」なんだから。キリストは、

「お前を絶対に捨てない。万人に捨てられたつていい、私は捨てないぞ」と仰る。讃美歌に「人は捨てれど君は捨てず」という一節がある。

「わが名の故に凡ての人に憎まれる。末の世に信を見んや」

とまで言われた。キリストの言葉は烈しい。



「もはや相対の世界ではない、本当の絶対の世界に入れ。相対の現実の中に絶対の現実が来ているんだ」

ということです。パウロは、

「我は罪びとの首なり」

と言った。内村先生が

「私は罪びとの首である。私が救われたんだから、万人が救われる」

と言った。その通りです。私も「罪びとの首」だ。もの凄い使命を担っている。逆にもの凄い力がくる。

●洗足

今度はヨハネ伝13章「洗足」（10月23日）の所です。一句だけあげてある。

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし。」（ヨハネ13・8）

この一句です。

「私がお前の足を洗わなければ関わりはない。私はお前を洗う為にやって来たんだ」

と。この「洗足」とは一番人間の汚れている所を洗うために、罪を贖うためにということ。

「ペテロは言った、「私の足なんか、いつまでも洗わないで下さい」。するとイエスは「もし私がお前を洗わなければお前は私と関わりがない!」と。ふしぎな言であった。即ち、足を洗うことは、我々の罪を贖う意であった。贖罪による救済のためにイエスは地上に現れたのである。洗足を拒むことは贖罪にはあずからないでいいということになる。それではキリストからの本願的關係が切れるから、キリストはこのように言ったのである。十字架の贖罪のあと、復活、昇天するキリストが約束したのは聖霊の降臨であった。聖霊が五旬節の日に降って、ペテロは初めて、十字架の贖罪と共に洗足がその予徴であることを悟った。」

私たちのキリストとの関係は、正に、洗足的関係なんです。十字架で洗ってくださる。神さまの義を与えんがために、

「宥めの供物」

というのがそれです。十字架は正に義と愛ですから。天地を貫いている義が縦の線、人を救うのが横の線。義のラインと愛のラインです。

「神の痛みの神学」というのを北森氏が書いた。あれはドイツ語や英語にまで訳されている。神さまの「痛み」は分かれますよ。けれども、十字架は単なる「痛み」ではない。これは本当の「砕け」です。イザヤ書53章です。それは烈々たる義であり、烈々たる愛なんです。何かセンチメンタルな「痛み」なんてなものではない。「痛み」という言葉もあるけれども、本当は「痛み」ではない。あの「痛み」というのはエレミヤ記31章から来た言葉です。ところが、本当はあれは「呻き」という字なんです。神の呻き、聖霊の呻き。呻きの方がもつ



と深い世界です。キリストの十字架はもの凄い呻きの世界です。呻きの世界だが、そいつが本当に「砕け」に化して、烈々たる愛に変わってしまうわけです。ゲッセマネの祈りで本当に十字架を彼は受けとられた。そうしたらもう、

「我はそれなり」

というわけで、ローマの兵士に自ら捕まっていかれた。

「十二軍に余る御使を下してお前たちをやっつけようと思えばできるんだぞ」

と。エリヤよりもつと素晴らしく、いきなり天界に行けた。だから、キリストは十字架上で、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

と言った。あれは義の叫びです。

「なぜ私をお捨てになるか。あなたの義を貫いて、御意を完全に成就したのに、これが捨てられてたまるものか。義が崩れてしまう」

と。しかし、その捨てるのは、人を本当に救い上げるための捨て方であつた。そのことを、もうちゃんと先までもちろん読んでいらつしやる。けれども、あの叫びは、本当に叫ばなければならぬ。捨てられるはずのものではないから。

「彼らを赦してやってくれ」

と、これが赦しの世界です。

●聖霊・助主・慰主

その次は、ヨハネ伝16章「聖霊、助主、慰主」（10月27日）のところです。

「けれども私は本当のことをきみらに告げる。私が去るのはきみらに益である。私が去らないと助主はきみらに來ない。私が往つたら、これをきみらに遣わす。……きみら

世にあつては患難がある。けれども雄々しくあれ、私は既に世に勝つたから。」（ヨハネ

16・7、33）

世に、サタンに勝つた。世の君はサタンだから。この助主、慰め主は本当にあり難い。私は、どんな事が起きても必ず聖霊はそれ以上の力をもつて私に臨んでくださるから、絶対に行き詰まらない。あり難くてしょうがない。いろんな事にでつくわせば、逆にみ霊が働く。それは、十字架でこちらが無になつてゐるから。無を賜つてゐるからです。自分を何かと思つてません。だから、聖霊は楽に力強く働く。あり難いね、この助主、パラクレートスは。あるいは、弁護人といった方がいい。本当にその人のために執成す者なんです。この福音は楽しいね。

●大祭司の祈

その次は、ヨハネ伝17章「大祭司の祈」（10月28日）のところです。

「イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言い給ふ「父よ、時きたれり、

我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守り給え。これ我等



の如く、彼らの一つとならんためなり。……汝我を世に遣わし給いし如く、我も彼らを世に遣わせり。……父よ、汝我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり。これ我らの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。即ち我彼らに居り、汝我に在まし、彼ら一つとなりて全くせられん為なり。」（ヨハネ17・1、18、21～23）

第1節、この大祭司の祈りというのは凄いとこらだ。

「父よ、あなたと私はお互いに居ることく、彼らも我らに居らんためなり」

と。「互い」という字はおもしろい字だ。お互いに入っていくような、組み付いているような字です。もう、みんな一つになる。「神・キリスト・聖霊・我」が四位一体なんです。

「四位一体と成らんためなり」

と。「二つ、一つ」と書いてある。全部これは四位一体の一如の世界、十字架・聖霊を中心にした一如の世界です。渾然一つという。愛におけるところの一つです。一つにするものは愛だけなんです。ヨハネに示されている言葉の方が、愛に関しては、パウロよりも凄い。

●愛は神より出づ

ヨハネの第一の手紙の第4章「愛は神より出づ」（12月24日）のところ。

「愛する者よ、我ら互いに相愛すべし。愛は神より出づ。凡そ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらに顕われたり。神はその生み給える独子を世に遣わし、我らをして彼によりて生命を得しめ給うに由る。愛というは、我ら神を愛せしに非ず、神我らを愛し、その子を遣わして我らの罪のために宥^{なだ}めの供物となし給いし是なり。愛する者よ、かくの如く神我らを愛し給えり。……未だ神を見し者あらず我ら互いに相愛せば、神われらに在^{いま}し、その愛も亦われらに全うせらる。神、御霊を賜いしに由りて我ら神に居り、神我らに居給うことを知る。」（ヨハネ一4・7～13）

「愛は神より出づ、我ら互いに相愛すべし、神み霊を賜いしに由る」

これは私がそれらの言葉をただ連ねた。光と同じです。どんなに電気の光があつたってダメだ。光は太陽より出づというわけだ。ゲーテは死ぬ二週間前に、

「キリストの前には無条件に頭を下げる。自然界では太陽の前に無条件に頭を下げる」

と、はつきり言った。太陽が無くて生きていられるかと。偉大なる人間は、普通の人は何とも思わないことに対して驚嘆する人です。

とにかく、日本の若い人たちはだいぶん狂ってしまったている。コマーシャルリズムが悪い。あんなテレビばかり見て、へんてこな化け物みたいものを見て喜んでゐる。この頃の小さい子は少し意識がおかしくなっているのではないかな。昔からの古典的な文学、そのや



さしく書いたものがいくらでもあるんだから、ああいうものをじっくり読まなければダメだ。そういう叢書もある。何しろ、悪いのは若い人たちではない。先生方、親が悪い。本当の教育、薫育くんいくをしていないから。結局は、

「先生方の魂が天を相手にしていないからだ。教える人に宗教が溶け込んでいないで本当の教育ができるか」

ということだ。海水は、塩は見えない、けれどもなめてみれば、塩辛い。そういう人間にならなければダメだ。キリストも、

「汝らは地の塩なり」

と言われた。これは「汝らは海の塩なり」だ。

日本が一番、精神的に危ない。誰彼ではない。日本人自身が問題です。政治家ばかりではない。我々は、この福音を受けとった者は、これをただ隠しているわけにはいかない。

「燈台は屋根の上に置くではないか」

と、キリストが言われた。メノラーです。黙示録にも、メノラーのことが出てくるでしょ。

「愛は神より出づ」は、私たちには具体的には、

「愛はキリストより出づ」

だ。キリストそのものが愛そのものである。

「それを受けとると、永遠の生命である」

と言ったって構わない。そういう烈々たる燃える世界に入ると、病がとつかない。私は聖霊が来てから病んだことがない。まあ、聖霊がきたって、病むことは人によつてはあるでしょう。そんなことを私は言っているのではない。けれども、必ず勝ちます。

●永遠の生命たるロゴス

ヨハネ第一書の3章16節「永遠の生命たるロゴス」（12月23日）のところ。

「主はわれらの為に生命を捨て給えり、之によりて愛を知りたり。我らもまた

兄弟のために生命を棄つべきなり。」（ヨハネ13・16）

これはヨハネ伝3章16節とあい似たような所です。

「それ神はその独子ひとりごを賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3・16）

と。永遠の生命、愛ということです。

「愛は生命を棄てる」

というのは、

「愛は永遠の生命を人に与える」

ということだと言ってもいい。生命を「棄てる」ということは「与える」ことです。そこらに棄てるのではない。道端に棄てるのではない。犬死するのではない。いろんなことで、



私たちは救われてきたんだ。だから、それだけ使命がある。

●視よ、我れ戸の外に立ちて叩く

それから、黙示録第3章「視よ、我れ戸の外に立ちて叩く」（12月25日）の所を見ましょう。

「視よ、我れ戸の外に立ちて叩く、わが声を聞きて戸を開かば、我その中に入りて彼（なんじ）と共に食し、彼（なんじ）亦我と共に食せん。勝者には我と共にわが座位に坐すことを許さん。」（黙示録3・20～21）

「勝ちを得る者」と書いてある。この世に勝つという。キリストは一緒に御飯を食べることが好きだった。だから、

「戸が開いたら、中で一緒に食べるぞ」

と。キリストを食べる、み霊の御馳走をいただくということです。

「我を食らえ、我を飲め」

と仰った。気がついたら、いつもキリストは私たちの魂の扉を叩いていらつしやる。キリストの愛のせまりです。そんなに私たちを囲んでおられる。

●羔の婚姻

そして最後は、黙示録の第19章「羔の婚姻」（12月29日）の所です。

「⁶われ大なる群衆の声洪水の音の如く、烈しき雷霆の声の如きを聞けり。曰く「ハレルヤ、…羔の婚姻の期至り、すでにその新婦みずから準備したればなり。⁸彼女^{かれ}は輝ける潔き細布^{ほそぎぬ}を著ることを許されたり。この細布は聖徒たちの義しき行為なり」⁹御使また我に言う「汝書き記せ、羔の婚姻の饗宴に招かれたる者は恵福なりと。」（黙示録19・6～9）

歴史の終末に、新天新地でキリストの大饗宴に与かる。ダンテはその所を薔薇の花のような群にして書いている。私たちには、そういう新天新地の大希望があつて、地上の人生はその序曲である。そのためには、本当にキリストの愛を実証していかなければいけない。それでなくて、どこに本当の喜びがあるか、どこに本当の幸いがあるか。「幸せ」なんてな言葉をよく使うけれども、

「本当の恵福はキリストの愛を体現するところにあり」

ということだ。愛は、体現しないで、ただいていただけではダメなんだ。どしどし、それを人に与えていかなければ。パウロの言葉で言うと、

「キリストの内に生き動きまた在るなり」

というわけです。とにかく、パウロにしろヨハネにしろペテロにしろ、キリストに圧倒されて彼らは生きていた。私たちもそのようにして生きましょう。

